

# 美しい構造物，美しい写真

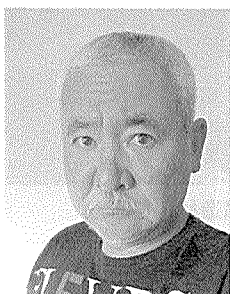
西山 芳一\*

## 1. はじめに

土木構造物を設計するにあたって，“用”“強”“美”の三要素が不可欠であると聞いたことがある。確かに“用”と“強”は分かりやすく，極端に言えば“用”を成さぬもの，弱いものは造る意味がないということであろう。しかし，土木構造物を撮影しながら日本全国を歩いていると，構造計算間違いでの落橋や，日本では皆無だと思っていたガムの決壊など“強”の要素を欠いた話を耳にすることがまれにある。そして，新しく造られたものであるにもかかわらず，明らかに“用”を成していないのでは，と思しき土木構造物との出会いの多さには心底驚かされる。政治や時代背景によってその必要性や許容量が変化する公共の構造物が主であるから仕方ないといえばそれまでだが，50年，いやいや100年，200年先を見越した計画，設計が今後は必要となろう。材料や素材の強度，耐久性は日に日に増している。布引ダムや小樽港北防波堤など，100年以上を経過してもいまだ現役の土木構造物が今日も元気に働いているのだからなおさらである。

さて，“用”については計画系，“強”については構造系の先生方にお任せするとして，残るは土木構造物の“美”とは何かである。そもそも美の基準は個人の価値観により異なるものであり，その個人にしても明確に終始一貫してそれを押し通せるものでもない。しかし，大勢の共通認識というものは時代により多少変化はするものの確実に存在するのである。たとえば程度の違いはあれ，美人はおおかたの人が美人であると認識する。先日ミス・ユニバース世界大会で世界第2位という快挙をなした日本人，知花くららさんのグローバルな評価に賛同される方は性別を問わず多くいることだろう。

では，土木構造物の美という決まった尺度では語れない観念を，土木構造物を見ながら撮りながら，また他の被写体である人や物の撮影話も織りまぜながら解き明かしていくことにしよう。



\* Hoichi NISHIYAMA  
土木写真家

## 2. 土木と広告

美術大学の写真学科在籍時は，私の写真に対する興味の大半は広告写真であり，広告代理店で撮影助手のバイトをしながらの学生生活だった。そんな1970年代は経済の高度成長期が円熟期となり各家庭の生活必需品はほぼ揃ってきた時代。次は自動車などの夢の大型消費財だと憧れを喚起し，もっと多くの消費をあおるための販促競争が盛んになる。そのため頻繁に広告表現が使われた。もっとも広告が活発な時代であり，もっとも広告が芸術に近寄った時代であるともいえる。広告写真も活況を呈し，駅張りの大きなポスターが，かたっぱしから盗まれたというニュースを懐かしむ方も多いであろう。有名な篠山紀信氏も立木義浩氏も広告写真家だった。広告とは縁遠く思われがちな荒木経惟氏も実は大手広告代理店電通の社員だった。そして80年代には広告の主媒体が印刷媒体からテレビコマーシャル全盛の電波媒体へと移行し，広告写真もコマーシャルムービーへと主役を譲ることとなり，やがて90年代のバブル崩壊へとつながる。

広告芸術最盛の70年代，美の基準は広告の中にあり，広告が美の基準を作り上げたといっても過言ではなからう。受け手である消費者の多様性や選択力のまだ乏しいなか，何気なく見聞きしてしまう溢れるような広告媒体によって，モデルが美人の典型を決め，自動車などの工業デザインでは直線で構成されたシャープさを美として押しつけることになる。このこと自体はとても危険であり，公平な情報開示とはいえない。しかし，求めるものが美の共通認識だったためさしたる問題はなく，逆に，そんな広告に刺激を受け，反発し，美の多様性を問うたアングラや純粋芸術が多くのジャンルで市民権を得て花開いた文化的にも円熟した時代でもあった。

このように消費耐久10年に満たないような自動車などの工業製品，いわゆる動産における美の基準は，その都度変化することも望ましい。人間は勝手なもので，すぐに「飽き」がくる。しかし，この「飽き」というのも経済的には重要な要素であり，メーカーと広告代理店により計算し，仕組まれたものでもあるのだ。大多数の消費者は数年ごとのモデルチェンジで確実に自家用車を買換えている。現在の大手広告代理店の売り物は消費動向のみにかぎらない多種多様な調査による分析結果である。美の基準だけに留まらず，文化までも左右しようとしているようである。

広告から土木の世界に目を転じてみると，土木の業界が非常に広告下手なのがよく分かる。残念ながら本来は広く公に告げねばならない公共事業の意図すらもよく伝わって

こない。土木構造物の真の姿を広く公に見せてもいない。多くの土木構造物施工中の紹介パンフレットは、そのすべてを理解できるのは業界人だけであり、分かりやすいものを作ると、一転して幼稚園、小学生向きになってしまう。これは広告代理店が消費者に対して行っているような、土木を享受すべき地域や全体の利用者に対する徹底的な調査と分析が、土木業界には足りないことに起因することも多からう。個人情報保護など難点もあるが、前述したように、ある側面として美の基準は作られたものだと仮定すると、土木構造物の美を知るにあたって、土木享受者の調査と分析は重要課題となってくる。

### 3. 安心なかたち

次に、形から見えてくる美しさを探ってみよう。視覚的な美の基本はまず安心感であり、整っていることである。土木構造物は巨大である。少なくとも生活に密着した物体よりも確実に大きく重い。そこでの安心感は安定感に置き換えることができる。整っているとはバランスのとれた姿であり、乱れはストレスを感じさせる。バランスの保たれないストレスをもった構造物は往々にして美しいとはいいがたく、写真で美しく見せるには視点をかなり厳選せねばならない。二本の主塔で支える長大な吊橋を例にとると、側径間：中央径間：側径間の比率が1：2：1である明石海峡大橋はストレスを感じず、360度どの方向から見ても安定感がある基本的な美しい構造物といえる。同じ吊橋でも比率が1：4：1のレインボーブリッジは、真横からの晴海ふ頭や品川ふ頭から見るアングルでは寸詰まりの両側径間にストレスが見えてしまいアンバランスともいえる。この橋を美しく撮ろうとするとアングルにかなりの制限ができてしまい、斜めからの視点となるお台場周辺からであればまずまずである。構造的にストレスのかかっているものは、見ていると不安をあおり気分が滅入って美とはほど遠い存在となる。

形のもつ安心感にはもう一つある。各構造物のオーソドックスなスタイル、要するに基本形である。物には必ず基本形が存在し、橋には橋の、ダムにはダムの基本形があり、それを逸脱したデザインには抵抗を感じるのは当然だ。自動車のデザインは馬車を原型とし、初期のベストセラーになったT型フォードが自動車の基本形といえるだろう。そのフロント部の構成はタイヤ、フェンダー、ライト、大きなラジエターグリルを前方にもつボンネットという単体部品の組合わせであった。現在の小型車やスポーツ車はそのほとんどが空力を考えたすえ、一体化しているが、ロールスロイスやベンツ、ジャガーなど高級車になればなるほどおのおのの構成要素のよすがを見事に残した集合体としてのデザインが見てとれる。基本形を残したデザインは高級車に必要とされる安心感と安定感の顕れであろう。

土木における基本形はまちまちである。個人の原風景の中に存在した土木構造物はそれぞれ違った形をもっているはずであり、年齢的にも差異は生じる。しかし、ダムの基本形は教科書で見たような黒部ダムに代表されるアーチ式、もしくは佐久間ダムのような重力式といったコンクリート

の塊なのであろう。美醜とは関係ないが、多くの人がロックフィルダムを下流から見ると、ダムと認識できずに単なる岩山と勘違いしている。このことを逆手にとって緑化などを施せば景観的に多いにプラスになるはずだ。

個人的な感想として聞き流してほしいが、最近流行のエクストラード橋が苦手である。主塔上部と橋脚との長さのアンバランスに嫌悪感を覚え、橋の全景はどの視点からでも陳腐に見えてしまう。そうなると撮影にならない。出直しである。撮影しないわけにもいかず翌日の再挑戦で、あの構造物は「橋」ではなく、港に架かる連続的な「門」なのだとか何度も自分に言い聞かせてなんとか撮影した。私なりに正義感にも似た基本形へのこだわりが強すぎるのかもしれない。この形式がもっと流行ればいずれは基本形のひとつになってしまうかも知れぬのに・・・。

### 4. 土木の美

最近太り気味になった己が身体を見るにつけ実感することは、無駄を省いた姿は美しいということだ。とくに神の創造した形の中でもっとも美しいと思われるのが女性の体である。適度な大きさで丸みを帯びた乳房と尻、それは決して無駄なふくらみではなく、女性本来の産み育てるという機能の形である。だからこそ美しい。最近、若い女性の必要以上に無駄を省いた美への極端なまでの追及は、せっかくの機能美までも削ぎ落としてダイエットに励みつけ、出産と育児、いや結婚までも放棄し、忘れさせてしまうようだ。少子化の一因かも知れない。

土木構造物において、無駄を省いた機能の形として女性的な美しさをもつのがアーチである。必要最小限のコンクリート量で造られたアーチダムは、“用”と“強”とを充分に果たした形の中に“美”が見えてくる。スパンを稼ぐためのアーチ橋はそのすべてが美しく、ローマの水道橋に見られるようにグローバルな橋の原風景であり典型ともなっている。アーチ曲線には母親の乳房にすがる安堵感に通ずるものがあるのかもしれない。同じスパンであれば直線のトラスや桁の直下にいるよりもアーチの直下にいるほうが安心でき、落ち着けるのは私だけではないはずだ。

そして、公共事業を前提とした土木構造物には“用”“強”“美”だけでなく“無駄を省く”“安心できる”も重要な要素である。土木のアーチは決して装飾ではない。三要素をすべて満たした形、そこに、一概にはいえないが“安価”と“安心”の“安”が加わったアーチが土木の美のひとつではないだろうか。

### 5. 感じる土木

写真は視覚に訴えることでしか表現できないが、土木構造物の美しさは必ずしも視覚的なものだけとはかぎらない。1999年、国の重要文化財指定を受けた九州の白水堰堤を例として、人の五感に訴える美しい土木構造物を考えてみよう。高さ約13m、長さ約87mで、規模的にはいたるところにありそうな農業用溜池の堰堤である。おそらく地形に無理なく合わせたのだと思われるが、右岸側には鞍状の特異な曲線で構成された流路、左岸側には円形の階段状流路

がある。中央部は石張りで全越流式となっている。1938（昭和13）年の竣工である。時代は戦争に向い、デザインや装飾皆無で竣工された軍用構造物ばかりのなか、大分県の山中ではわれ関せずかのように施工したのか、自然に合わせた凝った造りの構造物はその姿だけでも十分に美しい。圧巻なのは、水の流れである。少量の越流ではサヤサヤと奏でながら繊細なレースのごとく堤体を流れ落ち、左岸の階段ではシャンパンフォールのように見事に伝い落ちる。そよぐ春風は芽生えの香りを運び、おだやかな陽光とともに降り注ぐマイナスイオンは癒しの空間をさらに盛り上げる。一日中いても飽き足らず、撮影予定を変更して三日間もそれを感じた記憶がある。

流量の多いときは一転して怖いほどにすばらしい。中央の流れは真白き壁となり、他の音を一切許さないような轟音で絶え間なく吼え続ける。右岸の鞍部では水流が何度も何度もこちらに駆け登ろうとする。その流れを凝視していると一瞬無重力になり、冷たい水しぶきとともに、まるで巨大な白龍に呑み込まれてゆくような錯覚に陥る。このようなときにはかなり危険なのであまり近づかないようお願いしたい。何度行っても違った表情を見せてくれるすばらしい堰堤である。

土木と水とは非常に縁が深い。水は土木構造物を美しくも醜くも見せられる大事なわき役といえよう。水には動きがある。動けば音が聞こえ、風を生む。風は季節の香りを運ぶ。残念ながら味覚だけは土木構造物からは感じ取れないが、多くの感覚で感じ取る気持ちよさは、まさしく「美」である。

## 6. 時が語る美しさ

私の土木構造物を撮るタイミングとしては、施工中、竣工時、土木遺産の3通りに分類できる。施工は構造物の形ができてゆく途中の姿。竣工はその構造物の用をなす形としてもっとも綺麗なときの姿。土木遺産は時を経て貫禄のついたものや、役割を終えてひっそりとたたずむものの姿である。人生に置き換えると分かりやすい。施工は七五三や運動会のスナップなど、子供の成長記録写真。竣工はこれから世のため人のために働こうと一人前になる祝の成人式や結婚式の写真。土木遺産は人生を重ね、皺が時を物語るようなお年寄りのポートレート。役目を終えて解体撤去され、その写真が遺影となることもしばしばである。土木構造物も人間も美しい時があり、そのつどに写真を撮影して残しておくことが大事であり、時を経てその価値を生む。

ここで私がかもっとも愛し10年に渡って撮り続けている土木構造物を紹介しよう。それは1937（昭和12）年、北海道の中央部、大雪山の麓に主に森林資源の輸送のための鉄道橋として造られた11連のコンクリートアーチ橋、タウシュベツ川橋梁である。十数年供用された後、時代の要請が森林資源から電力資源へと移行した1953年、糠平ダムの完成とともにそのダム湖に沈む運命となる。しかし、ほぼ毎年の冬から初夏にかけては水位低下のために姿を現す。その繰り返し、極度の風化をコンクリートに与える。

冬は零下30度にも達するような極寒地。橋脚の高さで湖

面は一夜にして結氷する。極端なまでの凍結融解を毎日受け、やがて春を迎える。待っているのは暴風と砂塵によるブラスト攻撃。夏は水位上昇に伴う波浪の洗礼。落ち着けるのは水中に没しているときだけかも知れない。

このような構造物をほかに知らない。ダムに沈む構造物は多々あるが、素材も違えば規模も違う。そこで、7年間撮り溜めた写真を選択し、2002年の秋、この橋だけでの写真集「タウシュベツ」を上梓した。多くの読者から、まるでローマの水道橋のような存在感に美しさと時間を感じるという感想をいただく。この橋は沈み始めて50年、片やローマの水道橋は2500年の時を経ている。ということは、タウシュベツ川橋梁が1年で50年分の風化を受けている計算になる。

2003年11月のとある日、地元の新聞社から電話が入り、水中に見えるタウシュベツ川橋梁が一部崩落しているようだとの知らせを聞く。どうやら同年9月の十勝沖地震で湖の水圧をまともに受けてしまったらしい。水中に没していても安心できない構造物を哀れに思った。翌年、雪融けとともに様子を見に行った。長年土木写真を撮ってきたが、構造物に対して涙を流したのは初めてである。

今でも毎年行っているが、一部崩落後の風化は以前より進行が速い。崩落箇所のアーチリングもかろうじてつながっているだけである。連続アーチの一部が切れると全崩壊も速いらしい。観光客も増えてきたので、このままの姿で残したいという意見もある。しかし、大方の土木構造物の運命は解体撤去で終わる。そんななか、徐々に土に帰る土木構造物がひとつづらいついてもよいのではなかろうか。できれば最後まで撮り続け、看取ってあげたい美しい構造物である。

## 7. 美しく見る、撮る

「つねに美しいというものは存在しない。」と思っている。たまたま美しいときに出会ったか、みつけたかのどちらかであろう。美に出会ったとき、人はつねにそうあるべきと願う。しかし、次の出会いで落胆する。そんな一期一会であることが多い。たとえ写真を撮って残そうとしても実際の美とは叶うべくもないはずだ。

しかし、写真家は美しく撮って、平面にその美を凝縮させ貯留させるというひとつの職能もっている。人物撮影であれば、ほめ、おだて、話術を駆使して最高の表情を捻出させ刹那を切り取り、盗み撮る。スタジオに入る大きさのものであれば、舐めまわすように見て触って動かしてアングルを決定し、いくつもの方向からライトをあて、美しさを引き立たせてからおもむろにシャッターをきる。自然が相手であれば、歩き、登り、掻き分けて目的地にたどり着き、点を決めてひたすら美しき瞬間を待つ。いく日もかかることもある。

人の造り出してきたものでもっとも巨大なものが土木構造物である。ふだんは寡黙で動じないが、いろいろな方向から見つめてアングルを決め、カメラを構えて話しかけると、いつしか饒舌になり、すばらしい表情を見せてくれる瞬間がある。これがシャッターチャンスだ。もちろん

その時は太陽の光をはじめとした周りの自然全てが、計算どおりに被写体を盛り上げ、絶賛してくれている。

そのもの、形だけの美しさを考えて土木構造物を造り出そうとしても無理が生じてくる。人間の日常生活の営為から造り出される土木は、神の造った自然との対話、協調なくしては在りえないのだ。そんな景観を考え、太陽の位置

を見極め、衆目の視点場までをも考えながら、用と強とを満たした美しい形の設計を為されて造り出されたものが、美を感じさせやすい土木構造物といえよう。

土木写真家として、写欲をそそり、撮るに値する土木構造物の出現を期待してやまない。

【2006年9月19日受付】



写真 - 1 白水堰堤



写真 - 3 一部崩落したタウシュベツ川橋梁 (2006年8月撮影)



写真 - 2 写真集「タウシュベツ」大雪山の麓に眠る幻のコンクリートアーチ橋